



Title	西鶴中期浮世草子の研究：『懷硯』『新可笑記』を中心に
Author(s)	仲， 沙織
Citation	大阪大学， 2017， 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/61396
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 （ 仲 沙織 ）	
論文題名	西鶴中期浮世草子の研究—『懷硯』『新可笑記』を中心に—
論文内容の要旨 本論文は中期の西鶴浮世草子作品、特に従来評価の低かった『懷硯』（貞享四年〈一六八七〉三月序）、『新可笑記』（元禄元年〈一六八八〉十一月刊）の読解を試みたものである。本論文の方法は西鶴浮世草子作品の章段全体の読解を行うことにある。具体的には典拠の指摘とその利用方法について検証し、語句の意味を明らかにすること、そして当時受容された文化や思想を参照し、章段の読解を行う。 第一章『懷硯』の研究・第一節「『鞍の色にまよふ人』は誰か—『懷硯』巻二の四における謡曲「梅枝」の影響—」、第二節「狐の「芸尽し」考—西鶴『懷硯』巻二の五をめぐる—」は『懷硯』を扱った論考である。 巻二の四「鞍の色にまよふ人」は従来、仙人の異能を示す仙人譚、あるいは孝への疑義によって体制を批判している作品として捉えられてきた。本稿では、先行研究で指摘されている典拠、中将姫説話との関わりを再考察し、そして構成全体の新たな典拠として謡曲「梅枝」を指摘した。また、章題の「鞍の色にまよふ人」の「鞍の色」とは鞍を打つ音、つまり継母のために男装して鞍を打つ音であり、そのような継母への愛着によって「まよふ」状態となり成仏できなくなった「人」、すなわち美童を指す章題であることを明らかにした。そして典拠となった二作品がいずれも女人成仏を主題としており、巻二の四も継母への執心に迷う美童が、伴山と出会うことによって成仏し、救済されるという展開と読むことが可能であり、巻二の四は仏教思想を基にした物語であると考えられるのである。また、「物いはず、笑はず、絵かける佛かとうたかわれ」る、感情を全く表に出さない美童には、一見『懷硯』巻一の一で言及された「世の人こゝろ」を見出すことができない。しかし、美童には過酷な仕打ちを受けながらも継母を想う深い執心を持っており、そのような特異な「世の人こゝろ」を描いた章段であると評価することができる。 巻二の五「椿は生木の手足」は、先行研究において語句などの注釈はなされたものの、その内容については顧みられてこなかった章段である。本稿では、狐の変化という要素に着目して、西鶴作の『懷硯』巻二の五の考察を行うことを目的とする。また、典拠として浅井了意作の『大倭二十四孝』「二の宮花満」を指摘し、「二の宮花満」における稲荷の社の場面との関連を指摘する。『懷硯』巻二の五は狐の変化を人間の行為である「芸尽し」という言葉で表現していることが特徴的であり、狐の変化に当時の文化や風俗を反映させた点には西鶴の工夫が見られる。巻二の五は狐が主体となっており、伴山以外の人間が登場しない異質な章段であるが、ここにも狐の人間を模した言動を通して「世の人こゝろ」が間接的に映し出されている。 第二章『新可笑記』の研究・第一節「『新可笑記』における〈眼〉の機能」は、『新可笑記』全体における構成の問題について論じたものである。 『新可笑記』の低評価は作品の不統一性に求められる。『新可笑記』は同じ武家物の『武道伝来記』や『武家義理物語』と比較すると、『新可笑記』には一見して「敵討」や「義理」といった共通の素材がなく、統一性に乏しいと言わざるをえない。しかし、『新可笑記』には物事の真贋を見通す眼をはじめ、〈眼〉を用いた行為が描かれる章段が数多く存在することは注目すべき特徴であろう。本稿では、『新可笑記』における〈眼〉の機能に着目し、西鶴の創作意識について考察を行った。〈眼〉の効力を発揮する人物は、概ね賞賛の対象、もしくは優れた存在として描かれる。つまり、優れた人物は優れた〈眼〉を持つのである。一方、〈眼〉の効力を発揮できない人物は能力が劣った者だけではなく、優れた人物であっても心の変化により〈眼〉の働きを阻害されてしまうことが明らかになった。その他にも、『新可笑記』には〈眼〉が重要なモチーフとして利用された章段が存在する。また、〈眼〉と「虚実」との関連について明らかにし、序文と〈眼〉の機能の関連を指摘した。このように本稿では西鶴の〈眼〉の機能への関心と描写の工夫を明らかにした。また、従来多作品の残滓の寄せ集めであり、人心の描写に乏しいとされた『新可笑記』の再評価を行った。 第二節「『新可笑記』の描く「油断」—巻五の二「見れば正銘にあらず」考—」、第三節「『執心』への対処をめぐる物語—『新可笑記』巻四の一「舟路の難義」考—」は、『新可笑記』の中でも前半部と後半部が分裂しているとさ	

れ、『新可笑記』の中でも特に評価の低い章段について再読を行った論考である。

巻五の二「見れば正銘にあらず」は前半部では赤松家における二人の家老の権力争いが、後半部では刀の真贋をめぐる刃傷事件とその敵討が描かれるという構成をとる。先行研究においては、後半部が物語の主軸とされ、前半部については殆ど顧みられてこなかった。それは、前半部と後半部との繋がりが一見希薄であることが原因であろう。本稿では伊南芳通『続太平記狸首編』に描かれる赤松家の事蹟、主に嘉吉の変に関わるものが巻五の二の全体の素材として用いられていることを指摘した。また、「油断」というテーマに着目し、優秀な人物ですら油断に陥る心理と環境が示され、油断がより身近で怖ろしいものとして描かれていることを明らかにした。本章段はそれまでの軍書や教訓書が扱ってきた単純な教訓とは異なり、油断の性質により深く迫った西鶴の人間心理への関心や、描写の工夫が見られる章段として評価することができる。

巻四の一「舟路の難義」も、代官と妻の遊里通いを描く前半部と娘の狂乱を描く後半部との分裂が先行研究で指摘され、章段全体の読解や主題については顧みられてこなかった章段である。本稿では、前半部における代官や母親、後半部における娘の人物造形を分析することで、前半部と後半部の繋がりを示した。遊興に耽る代官は非現実への志向を、一方、遊郭まで夫に付いていく母親には相手に対する異常なまでに深い執心を持っており、娘はその両方を備えていると分析した。また、典拠不明とされてきた「養生の才智」について、その具体的な治療方法を推測した。さらに横笛物語や謡曲「角田川」という先行文学作品の利用を指摘し、巻四の一はそれらの哀れな世界観を母親の口寄せ場面において滑稽なものに変換している。巻四の一は全編にわたって「人の心の人為的な操作」というモチーフが扱われており、同時にその難しさについても描き出されていることを明らかにした。

第四節「偽物の「郭巨」物語—『新可笑記』巻三の五「取やりなしに天下徳政」考—」、第五節「悲劇の演出—『新可笑記』巻一の四「生肝は妙薬のよし」考—」では、『新可笑記』の中でも比較的言及される機会の多い巻三の五と巻一の四について、従来の読解の再検証を行った。

巻三の五「取やりなしに天下徳政」は『新可笑記』の中でも珍しく、先行研究などで取り上げられる機会が多く、評価の高い章段といえる。ただし、作中の奉行による裁決については、結末の息子の失踪を理由にその効力が無化されているという指摘がなされてきた。本稿は、巻三の五における裁決の役割や、作中でも登場する『二十四孝』「郭巨」の利用について考察を行った。先行する裁判説話との比較を行い、巻三の五は息子が親権を選ぶという裁決であることを示し、それは息子の失踪によって「どちらも選ばない」という判断が結末で描かれていることから、裁決はその場限りのものではなく物語の構成の中で大きな役割を果たしていることを明らかにした。また、「郭巨」と蒔絵細工職人夫婦の言動や物語の構成を比較した。それにより、蒔絵細工職人は「郭巨」と同じ富裕になるも、貧困による子捨てではなく子への愛情も描かれない子捨てを行った「偽物の「郭巨」」であることを示した。また、祇園祭の「人」によって息子が変心した場面において、京都という多数の人々が生きる世間が個人の心に及ぼす影響について論じた。

巻一の四「生肝は妙薬のよし」は、従来後半部における武士の述懐に注目が置かれてきた。近年ではそれを西鶴による体制批判の表れと見なし、巻一の四は体制批判を企てた章段として論じられている。稿者はそれに疑義を呈し、典拠と指摘されている『阿弥陀胸割』『清水寺利生物語』や、懺悔を描いた先行作品である『三人法師』、そして西鶴『本朝二十不孝』巻二の二「旅行の暮の僧にて候」との比較を行った。それらを通して典拠に登場しない母親の視点で物語が進行することにより、悲劇性が増幅していること、娘は武士と母親を宗教的に救いに導く存在として描かれていることが明らかになった。また、武士の述懐には環境による心の変化が描かれていることが注目され、また巻一の四には悲劇を演出しようとする西鶴の意図が見られることを論じた。

本論文では『懷硯』と『新可笑記』の各章段について読解を試みた。その結果、『懷硯』『新可笑記』の各章段に人心への関心が見られたことが注目される。『懷硯』の対象章段には「世の人こゝろ」の諸相が、『新可笑記』では人心のあり方、特に変化の様子が描かれている。西鶴作品における人心の在り方は、西鶴作品全体に関わる大きな問題である。本論文では『懷硯』『新可笑記』における人心の把握の実態を明らかにした。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (仲 沙 織)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	大阪大学 教授	飯倉 洋一
	副 査	大阪大学 教授	加藤 洋介
	副 査	大阪大学 講師	山本 嘉孝
論文審査の結果の要旨			
以下、本文別紙			

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 西鶴中期浮世草子の研究—『懷硯』『新可笑記』を中心に—

学位申請者 仲 沙 織

論文審査担当者

主査	大阪大学教授	飯倉 洋一
副査	大阪大学教授	加藤 洋介
副査	大阪大学講師	山本 嘉孝

【論文内容の要旨】

本論文は、西鶴中期の浮世草子（貞享三年から元禄二年までの十数作を指す）のうち、『懷硯』『新可笑記』を扱い、従来あまり論じられておらず、評価も低い章段をあえて取り上げ、その読解を行ったものである。西鶴研究の現状に対して自身の立場を表明した「はじめに」に続き、第一章『懷硯』の研究では、『懷硯』の二つの章段を取り上げ、第二章『新可笑記』の研究では、『新可笑記』全体の主題および、四つの章段を取り扱っている。（400字詰原稿用紙換算約280枚）。

第一章『懷硯』の研究の第一節では、従来仙人の異能を示す仙人譚、あるいは孝行への疑義によって体制を批判している作品として捉えられてきた巻二の四「鼓の色にまよふ人」について、従来指摘されている典拠（中将姫説話）を再検討し、全体の典拠として謡曲「梅枝」を新たに指摘し、典拠二作品が女人成仏を主題としており、本話も継母への執心に迷う男装した美童が、伴山と出会うことによって成仏・救済される展開と読解した。第二節では、従来作品論のない巻二の五「椿は生木の手足」の典拠として『大倭二十四孝』『二の官花満』の稻荷の社の場面を指摘、狐の変化を「芸つくし」と表現し、そこに当時の文化や風俗を反映した西鶴の工夫がみられると解いた。

第二章『新可笑記』の研究の第一節は、『新可笑記』全体の構成を問題とし、物事の真贋を見通す眼をはじめ、眼を用いた行為が描かれる章段が数多く存在することを指摘、従来寄せ集めと評されてきた『新可笑記』を貫く重要なモチーフとして〈眼〉の機能があるとした。第二節と第三節は、従来、話の前半部と後半部が分裂しているとされた評価の低い章段についての再読で、第二節では巻五の二「見れば正銘にあらず」を取り上げ、典拠として『続太平記狸首編』の嘉吉の変に関わる部分が素材になっていることを指摘し、油断というテーマが前半と後半を貫いていることを明らかにした。第三節では、巻四の一「舟路の難義」を取りあげ、代官とその妻の遊里通いを描く前半と、娘の狂乱を描く後半の繋がりを、非現実への志向を持つ代官、遊郭についていくほど夫への異常な執心をもつ妻、その両方を備えている娘と解することで示し、横笛物語や謡曲「角田川」などの典拠を指摘した。第四節と第五節は、比較的言及される機会の多い章段について、従来の読解の再検討を行った。第四節では巻三の五「取りやりなしに天下徳政」を取り上げ、息子を押し付け合う夫婦に対する奉行の「息子が成人するまで二人が協力して仲人の元で育てよ」という裁決が、結末の息子の失踪により無化されたという従来の読み

を批判し、息子はどちらも選ばない選択をした点で裁決は大きな役割を果たしたと読解した。第五節は一の四「生肝は妙薬のよし」は、忠義のために罪もない娘を殺す武士の述懐から、西鶴が当代の体制批判を企てたと読む先行研究を否定し、典拠の再考を通して、娘が武士と母親を宗教的に救いに導く存在として描かれていると読解した。

【論文審査の結果の要旨】

西鶴の作品研究は、近年、〈余白〉〈ぬけ〉〈カムフラージュ〉〈寓言〉と称して、本文に書かれていない西鶴の政治批判、体制批判を看取するものが少なくない。この傾向は西鶴研究にひとつの流れをつくっているようである。申請者は、このような状況に対して、本文の一見些細な表現を見逃さず、踏まえられている典拠をきちんと押さえた上で読み解くという姿勢を貫いており、これが一定の成果を上げ、新たな典拠の指摘や、従来の読みの否定、あるいは相対化に成功していることは高く評価できる。

たとえば、巻五の二で、目利者が十年前に殺した浪人の子供が「九つ」とされていることは矛盾であり、作者の不十分な記述であると指摘されていたが、申請者は「当年九つと申小坊主」と表現されていることに着目し、これは小坊主が浪人の子であることを隠す嘘で、これで目利者が油断したと解釈するあたりは、鋭い読みである。このような丁寧な読みによって、従来評価の低い作品を、十分鑑賞に値するものに引き上げた功績は大きい。また今回の論文によって新たに指摘された典拠も一、二にとどまらず、西鶴研究に大きく寄与しているといえる。論述の展開にもほとんど破綻がなく、安定した文章力が認められる。

他方、『懷硯』と『新可笑記』の二作品を取り上げた理由が明快でないこと、考察が後者に偏っていることは、博士論文の全体性の観点から言えば物足りない。また、整合性を求めるあまりに、やや無理な論理操作をしている点がないとはいえない。全体に精読の姿勢を貫き、あまりに真面目に読解しているために、西鶴作品の〈笑い〉〈軽さ〉〈速さ〉という魅力が後方に退き、その点で申請者が批判している諸論文と変わらないように感じられるのは残念である。

以上のような問題点は含んでいるものの、本論文が、やや硬直化している西鶴研究を揺さぶる読みと、新たな典拠の指摘を行ったことは、大いに評価できると思われる。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。